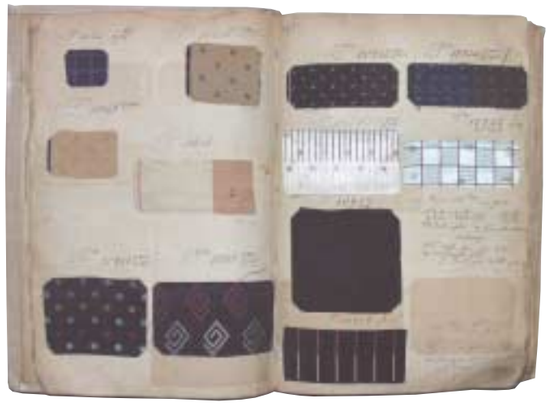
裂地帖のこと

京都高等工芸学校創立時の明治35（1902）年から顧みれば、この四半世紀の間に起きた事など、極極最近のことと言わなければならないのであろう。詰まり美術工芸資料館が設立して後、館が発展の契機とする活動を展開している事は、実は歴史の検証に晒されていないという意味で、その間の収集品は以後一世紀位は眠らせ、且つ精緻な調査が個々に就いて為なされなければならという事なのである。とは言え我々の収集活動は矢張り或る意味で前世紀初頭の先駆者たちが強く抱いていた時の意図を継承しているのだという自負は絶えず有ってはいる。前世紀初頭、京都高等工芸学校は色染、機織、図案の3学科で以って出発したが、前記二学科の標本は主として学科の性格上染織品であって、それを収集してきたのである。固より時代の趨勢を色濃く反映するものでもあった。


図版 AN.4820の或るページ

これらの中で数量的にいまだに確定できない程に厖大な量を誇る裂地帖なる分野がある。この分野をなおも充実させようと、この四半世紀に収集した裂地帖に今回は焦点を当ててみようと思う。

○

●「おりもの標本」（AN.4802:VT-792;Acq.:1932.05.05）に就いて

附属図書館より1987年6月15日に美術工芸資料館に供用換されたものである。元々は京都高等繊維学校会計課が昭和（1932）7年5月25日に購入し管理していたもので、標本番号かそれとも図書番号かは不明であるが3346と打たれている。標本帳の表紙見開きには「京都蚕業講習所第二七一四号一冊なる付標が貼り付けられているので、何かの都合で高等繊維学校の管理となったことが判る。表紙には「於里毛能標本」と和紙装表紙に墨書、更に朱印で瓢紋の中に「本田三郎:大邨彌七郎共集」とあるが、彼らが何時何を目して集めたのかそれを伝える奥付けらしきものの一切が見当たらない。なお、約10糎角程の裂156点には各々に名称札が付されていて、標本として素人にも判り易い。

●「絹織物裂地帖1888-1889」（AN.4820:VT-794;Acq.:1988.07.21）に就いて

ヨーロッパでも繊維産業が隆盛であったスイスで1888年から1889年に生産された裂見本帖で、背中に「910 ECHANTILLONS DE SOIRIES TISSEES 1888-1889」と記され、スイスとは銘記されていないが古書肆の案内でスイス製であることを知った。中を詳細に検討すれば織工房での制作用メモとして作成されたものと推し量ることが出来る。これと同じような体裁のものに「仏國織物標本帖」（AN.210:VT-132;Acq.:1913.03.13）がある。一方「織物裂地標本［帖］全10巻」（AN.260:VT-170;Acq.:1915.02.25）は上二件とは全く異なる体裁で、明らかにこれは顧客用に販売する目的の裂地見本帖であった事を知る。

●裂地帖「錦珠」（全1巻.含310裂）／「玉蘿」（全2巻.含391裂）／「泰川」（全3巻.含639裂）／「錦譜」（全3巻.含509裂）（AN.4851:VT-797;Acq.:1991.12.26）に就いて

京都江戸期の織師金田忠兵衛の仕事として「泰川」第3巻第12裂、及び「錦諺」第二巻第12裂が九鬼隆造編「稿本日本帝国美術略史」（明治35（1899）年刊）に採り上げられている。その後、戦前・戦後を通じて刊行される日本美術に関する通史の手本若しくは雛形とされる「稿本日本帝国美術略史」である。「稿本」は1900年パリ万国博覧会に於いて、長い歴史を誇る日本の美術を喧伝すべくフランス語に翻訳されてもいる。（美術工芸資料館蔵品紹介-34,学園だより72号、1993年10月、pp10-11、参照）。以上が美術工芸資料館設立後に収集したものであるが、それ以前でしかも戦後の収集を見れば一件しか見当たらない。即ち

図版の右下隅に勝安房の印／款あり　AN.2678

●「古代裁手鑑」（AN.2678:VT-741;Acq.:1959.07.14）である。

寄贈者は中原虎男氏であることが標本台帳から読み取れるが、それ以外は何の備忘もない。後に寄贈者中原虎男氏は色染工芸学科教授（1950-1959）であり、退官にあたって個人のコレクションを大学に寄贈したものであることが判った。裂地帖そのものの裏表紙見開きに「勝安房」の印というか款が認められ、346裂を含む、旧勝海舟の裂コレクションであることを知ることとなった。

○

蔵品番号順に見て目下の処、最も古い裂地帳は1910年2月10日に受入れられた4冊604裂を容する「捺染標本帖（旧書:捺染模様絹布類裂地）（外國品）」（AN.12:VT-2）である。ANs.2,4はいずれもAN.25に組み替えられているがそれらは懼らく、1902年6月の時点で既に標本として受け入れられたものではあり、このような例は少くない。ANs.1～113は1930年までの色染科の標本であり、ANs.114-617は機織科の標本である。色染科、機織科いずれの標本にも多く見られる裂地帖の殆んどは稲畑［勝太郎］商店を介して、クロード・フレール社からの輸入品であり本校が後に、製本合綴したものであり、先にも書いた通り数が膨大で、目下美術工芸資料館蔵調査研究会で、それらの全貌を把握するための調査を進めている処である。こんな中で「雑標本」として分類されていたことによって埋もれていた「DESSINS DE TISSUES（*Sic*）（Collection originale）（図案類）」（AN.1796;EX-24;Acq.:1916.09.05）なる資料が目を惹いた。裂そのものではないが布柄のオリジナル・デザインで彩色も鮮かで、造本の仕方も今までに見た事のないものである。調査報告の一環として記しておこう。

（美術工芸資料館長　竹内次男：2005.11月18日）